

二宮 陸雄 著

『新編 医学史探訪』

このたび二宮陸雄先生が『新編 医学史探訪』を出版された。B5判三二四頁、各頁に貴重な資料や原典が美しいカラー写真で紹介されていて、『図説 医学史探訪』と稱してもよい程の豪華本である。

ここには「医学を変えた」百余人の巨人が記述されているが、その際 著者が最も力を注いだものは巨人たちの原典である。

原典を解することなしに、正しくその人を知ることとはできない。著者は先づ巨人たちの原典に触れ、それを通じて巨人たちの語る哲学や医学思想に耳を傾けて後、史上の人物を論じ記述するという形式をとっている。それが本書のもつ特色となっており、ユニークな点でもある。

とは言え、原典（原著）の集蒐は容易な業ではなかったらうと想像される。

筆者も史上の人物を執筆した際、資料の入手に手を焼き、ほとほと困却したことを覚えていたが、本書をひもとくと、貴重な原典の傍に「筆者所蔵」と書かれているのに出遭い、大きな驚きを感じた。

著者も序文の中で、「これらの史料は一八九八年から……主に外国の古書店から入手したもので……度重なる欧州探訪の旅で集めた史料や撮影資料も多く、……（また）オランダの古

書店で若干の蘭書を手に入れることができた。」と記している。

苦心の程が偲れるが、それだけに図版を見て楽しく、読んで迫力がある。

本書は「国外篇」と「国内篇」とに分れている。

「国外篇」では古代インドの医学資料をスシュルタ集成に求め、スシュルタ（外科医）の人間観、倫理観と医学思想を説き起すことから始めて、今後の大きな発展が期待されているワトソンとクリックのDNA二重らせん構造の発見に至るまでの壮大な歴史が百余人の医学を築いた巨人像を通じて描かれている。

本篇は実は一九九九年に刊行されており、筆者も愛蔵しているが、読まれた方がおられるかも知れない。この旧著に「国内篇」を加えて一著としたのが本書『新編 医学史探訪』である。

「国内篇」を書き加えた事情を著者は「私は敗戦間もなくの医学部の一年生のころに解剖学の小川鼎三先生から『解体新書』にまつわる話をお聞きして、日本医学史、とりわけ蘭学によって新しい医学を吸収した人々の意気込みに感銘を受け、それ以来関心を深めていました」と序文のなかで書いているように、近代日本医学の黎明をもたらした江戸蘭学者を中心に、著者が探訪した成果が資料を通じて見事に記述されている。

行間に著者の意気込みと情熱が感じられる。筆者は嘗て（かつて）著者のなかで「動物の発生で、『個体発生を繰り返す』とは生物学の教えるところで、人間の場合、胎内の十ヶ月の間に動物進化の全過程を繰り返して、この世に生まれてくる。医師もまた一人前の医師となる過程で、その系統発生を繰り返す

ことが必要であり、遠い昔の医師の行っていたことから最近までの医師のあり方を、駆け足で繰り返すことが求められるのではなからうか。ここに医の歴史を学ぶ必然性がある。」と書き記したことがある。

また日本の大学には医史学の講座がないため(あるのは順天堂大学のみ)、技術者の医師が世に送り出されるともいわれている。

医史学のもつ意義とその責務は大きい。本書はそれらに應(こた)え得る質の高い良書である。

医を学ぶ者、医に関係ある仕事にたざさわる者は勿論、科学史に興味ある方の、是非の一読をすすめて止まない。

(荒井 保男)

〔医歯薬出版、東京都文京区本駒込二一七一〇、電話〇三—五三九五—七六〇〇、二〇〇六年三月、B五判、八四〇〇円〕

池田文書研究会 編

『東大医学部初代総理池田謙齋池田文書の研究(上)』

1

本書序文に記されたように池田文書研究会は昭和六一年七月に結成された。以来二十年間、ほぼ毎月一回、順天堂大学の一室に会し、酒井シヅ教授を盟主とする翻字編纂をしてき

た。このたびその成果を世に問うことになった。

この紹介記事が編纂実務と解題・註釈を執筆した酒井シヅ・深瀬泰旦・遠藤正治の三氏によつてではなく、この研究会に当初より参加できた一人ではあるものの、福沢諭吉のいう「筆とる職人」並の翻字に終始した小生がその役割を担うとは、いささか忸怩たるものがある。

いうまでもなく明治期の天皇制国家の建設と、それに参画した幾多の人々に関心を深める研究者によつて、いずれ本書の評価はなされよう。本書には、池田謙齋の履歴からみて、特に医学教育・軍医制度と皇室待医局に関わる制度の成立過程と、これと表裏をなす人事や治療等について、示唆に富む新史料が収められている。紹介する所以である。

本書の第一部には池田謙齋の養父池田多仲宛書状を収める。その書状は伊東玄朴・大槻俊齋・緒方洪庵等十名からの来状、全七九通である。

池田多仲は津和野藩医池田淳作の長男で、江戸に出て伊東玄朴に入門(玄仲と名乗る)。その縁で江戸の蘭方医達が経営する、お玉ヶ池種痘所医を勤めた。種痘所が文久元年(一八六一)に幕府の西洋医学所(後に医学所)となったことから、池田多仲は幕臣となる(深瀬泰旦氏著『天然痘根絶史』、二〇〇二年、思文閣出版刊)。

第二部が池田謙齋宛書状である。このたびの本書上巻には発給者四一名の全五五七通を収める。

池田謙齋(天保十二年、一八四一—大正七年、一九一八)